C.L. ドジスン(ルイス・キャロル)の作家への道と A. テニスンの位置

—1855年を契機にして—

平 倫 子

目 次

序.
1. ドジスンの家族と習作時代
2. テニスンとの出会いとドジスンの写真趣味
3. ワイト島, ファリングフォード邸とディンボラ・ロッジでの人的交流

序.

いくつもの家庭回覧雑誌を編集, 発行した経験をもつチャールズ・ラトウィッジ・ドジスン(1832—98)は, オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジで大学生活をはじめると, 詩や小品をおおやけの雑誌や新聞などに活発に投稿するようになり, それまでの家庭回覧雑誌を自分の習作帳「ミッシュマッシュ」へと発展解消させた。1855年卒業と同時に数学講師の職を得てからは, 本職と並行して書き手としての道を本格的にさぐるようになる。

本論は, 2001年6月英国ワイト島で開催された英国ルイス・キャロル協会の研究大会に参加して, 筆者がかねてから関心を抱いていたドジスンの詩にみられる死のテーマについて学び, 調べたことをまとめたものである。主として1855年作家への道の緒についたドジスンにとって, テニスンの存在およびその影響がどのようなものであったかを考察するもので,

1. ドジスンの家族と習作時代
2. テニスンとの出会いとドジスンの写真趣味
3. ワイト島, ファリングフォード邸 とディンボラ・ロッジでの人的交流

の三つの項目にそって, ドジスンの日記 [Edward Wakeling 編による], 手紙, 年譜, 伝記, その他のアーカイヴズ資料などを手がかりにしながらみてゆくことにする。1)ではおもに家族を中心に「父と子」のテーマをとりあげ, 2)ではテニスンの作品への傾倒ぶりと, 邂逅に向けて詩作と写真をどのように生かしたか, その時期のテーマをどのようにして「老いと若さ」に相対化していったかをみてゆき, 3)ではワイト島に住むテニスンを介して出会った芸術家や文化人との交流と, ドジスンの内面に芽生えはじめた「死と再生」のテーマまでを含めてみてゆくことにする。

すべてはドジスンの側からの一方的な憧憬に始まったこととはいえ, 同時代を生きた二人をめぐる交流のなかに垣間みえる時代の姿や作家たちの実像を捉えることが本論のもっとも大きな目的である。

なお, ここで扱う時代が主としてチャールズ・ラトウィッジ・ドジスンの前半生にあたるため, ドジスン家の家族についての言及をふくむ場合はチャールズ, その他の場合はドジスンで統一し, あえてペンネームのルイス・キャロルは用いなかった。

1. ドジスンの家族と習作時代

父親がチャールズに宛てた手紙が3通ある。最初のものは1840年1月6日，リーズに出張中の父親から幼いチャールズにあてた手紙で，約束のおみやげを手に入れるために父親がリーズの街を大混乱におとし入れた，という架空の出来事の顛末をノンセンス・タッチで書いたものである。

わたしの大切なチャールズ，

……おまえのお願いをわすれないから安心していなさい。リーズについたらすぐに道の真ん中で「金物屋，金物屋」と叫ぼう……なんとしてでもやすりとねじ回しとゆびわを手に入れるぞ。もし40秒以内にだれも持ってこなかったら，ちっちゃな猫一匹をのこしてリーズの街のひとびとや動物を皆殺しにしてやるぞ。そうしたら人々は，どんなにかわめきちらしたり髪をかきむしったりするだろうね！ブタと赤ん坊が，ラクダとダチョウが，いっしょに溝をころげまわる……おばあさんは煙突にかけのぼり，雌牛がそのあとをおう――アヒルはコーヒーカップにもぐりこみ，ふとっちょガチョウはえんぴつケースのなかにぎゅうぎゅうづめになってかくれようとした――ついにリーズ市長は，スープ皿のなかから発見される。……するとティーポットにかくれていた男がやってきてわめくことには「ああ，ロバをおとしてしまった。鼻のあなに入れたら，ティーポットのそそぎ口からお婆さんの指ぬきに落ちたんだ。お婆さんがゆびぬきをはめたらロバはおしつぶされてしまう」とおおさわぎ。たのんでいた品物がとどいたら街の人々のいのちをたすけてやるとしよう。やすりとねじ回しとゆびわを50台の荷車に乗せ，一万人の兵隊に守らせて，チャールズ・ラトウィッジ・ドジスンへおくろう。

きみをあいするパパより(コーエン，下81)

さながら愛と残酷のナーサリー・ライムの世界だが，意表をついて繰り出されるこれらのことばの一つ一つが8歳のチャールズのこころに種として落ち，それを育ててのちの作品世界に結実させたことは言うまでもない。

幼い頃からきょうだいとともに文学作品をよむ悦びを培い，ものを書くことに興味をいだいていたチャールズは，家庭回覧雑誌を発行していた時代，戯曲や物語や詩の習作をさかんにおこなった。シェイクスピアやミルトン，ロマン派の詩人などの詩を幅広く読み，それらのパロディーを試みるのが彼の詩作の第一歩であった。そもそもの始まりは，家を離れリッチモンドで寄宿生活を送るチャールズが，離れているきょうだい達を楽しませる目的で1845年に思いついたものであった。寄宿学校で学問をする喜びと誇りにひたりつつ，学校生活のなかで距離をおいて家族を見つめたとき，長男チャールズの目には父親の存在が大きく重くのしかかっていることに気づくのだった。1846年家庭的な雰囲気のリッチモンド校を卒業しラグビー校に入学すると，そこでの環境に終始なじむことが出来なかったチャールズは，家と学校生活の溝を埋めるため，そして自分を見失わないため，こんどはおもに彼自身の息抜きのために書くようになってゆく。そうした若書きの初期のものには「父と子」をテーマにしたものが多かった。距離をおくことが父親をパロディー化することを可能にした。滑稽なほど意図的なタイトルをもつ最初の家庭回覧雑誌『実益と教育のための詩』のなかの詩に規則づくめなものが多いこと，子が父をゆさぶり行いを改めさせるという反転の仕掛けがなされているなど，注目すべきものが多い。最初の詩「ぼくの妖精」(1845年)に出てくる，やりたいことは一切してはいけない，と忠告する<もう一人の自分>は限りなく父親像に近いものであるし，「寓話」と題された詩では，ふくろう親子のたとえばなしを聞いた王が，涙ながらに行いを改める，という大人のための教訓ばなしに仕上げられている。

なかでも特筆すべきものは,「改良をほどこしたシェイクスピアからの引用」である(全体の引用は『ルイス・キャロルの図像学』50ー53参照)。それは,シェイクスピアの『ヘンリー四世』からの引用である。先王リチャード二世の王位を奪って王になったヘンリー四世が,そのことへの良心の呵責に苦しみ病気になる。王の内面をあぶり出すかのように息子のハル王子は悪漢フォルスタッフと組んで自堕落な生活をする。そのことでさらに苦しむヘンリー四世はやがて死ぬ。ハル王子はヘンリー五世になり,より立派な王になるよう努力する。王位継承を主題にしたこの芝居の第二部4幕4場で,ヘンリー四世が死の床につき,ハル王子がまさに王位を継ごうという場面をパロディーにしたものである。ヘンリー四世とハル王子という登場人物を借りて,病床で眠りつづけ,夢と覚醒の境界に陥りがちな王をとらえ,ことばを媒体にして,王冠を受け継ぐ子という単なる世代交代を超えた父と子の権力交代にまでおよぶ様を論理的,風刺的に仕立て直した。これはのちの『鏡の国』の「夢をみているのはどっち?」という作品のテーマにつながるところであり,論理のねじれは言語理論をあやつる「ハンプティー・ダンプティー」の登場の予兆になっている。

チャールズの父親は男の子には遺産よりも教育費をつぎこむことをよしと考えていた。ドジスン家には男の子が4人,女の子が7人のあわせて11人の子どもがいた。1843年2月18日父親は,任地ダーズベリーから弟のハッサード・ドジスンに宛てた手紙で「相当額の金銭が教育に使われるのはそれに応えうる男の子にとっては,父の死後同じ金額を遺産としてもらうよりはるかに有益であると信じます」といっている。

その後チャールズはリッチモンド・スクール,ラグビー・スクール,オックスフォードのクライストチャーチ・カレッジと着実に学問の道に邁進し,父親は長男を将来自分と同じ道を歩ませたいと考え大きな期待を寄せていた。チャールズが大学時代の1852年12月,成績優秀で給費生(studentship)になったことを伝えてくると,父親の友人でクライスト・チャーチのピュージー博士からとどいた同12月2日付けの手紙「喜ばしいお知らせがあります。ご子息を特別給費生に推挙できることになりました」を引き合いに出し,さっそくチャールズに返事を書いた。以下は父親からの2通目の手紙である。

最愛の息子チャールズ,

たったいま受け取ったお前の手紙を読んで父さんが抱いたさまざまな感慨と感謝の気持ちはことばでは言い尽くせないほどだ。おまえのおかげでわたしや家族のみんながこんなにも喜んでいるさまを想像すれば,おまえの優しい心にわき起こる喜びもさらに大きくなることだろう。父さんは「おまえのおかげで」と書いた。なぜならわたしは古い友人のピュージー博士にこのたびのことで感謝しているけれども,おまえが自分の力でこの栄誉を勝ち得たのだよ,見事に。まさにおまえにふさわしい栄誉として授与されたのであって,わたしにたいする親切心から与えられたものではないという事実を告げるピュージー博士のことばほど,強力な証拠は父さんには望みえない……父さんはほんとうにうれしい。お前が,父さんがいつも教えようとしていた真実――「着実で,努力を惜しまず,つねに善い行いを心がける」人物こそが,ときどき素晴らしい閃きをみせながらも,シェイクスピアのことばで言えば「すぐ冷めてしまう」人物を負かして,結局は競争に勝つのだ,という確固たる真実を身をもってしめしてくれたことが。

(Collingwood, 53ー5, コーエン下, 83)

長男には是非自分の跡を継いでもらいたいと考えていた父親にとってこの知らせは,チャールズがまさにその第一歩を踏み出したかにみえ,最高の親孝行と映ったであろう。

しかしその後，1855年チャールズが大学卒業後に数学講師職につくことが決定したとみた父親は，23歳の息子の将来設計を長い手紙にしたためた。8月22日にチャールズは日記にそのことを「わたしの新しい職業と人生設計について父から長い手紙がきた」と書いている。以下は父親からの3通目の手紙の一部である。

.....10年間働くつもりで年に150ポンド貯金できるような収入で暮らすとすると

	ポンド	シリング	ペンス
4パーセントの利率で投資	100	0	0
1500ポンドの生命保険	29	15	0
書籍代(一般的な本は別)	20	5	0
計	150	0	0

10年後，身をかためるだけの生計がたてられるとして貯蓄の結果がどうなっているかというと，

1) 即使える金が1220ポンド。家具を入れたりその他の資金とする。
2) 死ねば1500ポンド手に入る。年間の掛け金はこの時点で保険に入るよりはるかに少なくてすむ。
3) 有用な蔵書。200ポンドを超える価値あり。この十年間に通常の収入で購入した本とは別にして。

(Collingwood, 61, コーエン上, 110)

チャールズはこの手紙には反発を感じたらしく一切関心を示さなかった。そればかりかしだいに父親の宗教思想にも疑問をいだくようになり，テニスン，モーリス，コールリッジ等の思想に強い感化を受け，より自由な宗教観を持つようになってゆく。1855年夏の休暇中，チャールズは出版されたばかりのテニスンの『モード』を手に入れ，コヴェントリ・パットモアの『家庭の天使』やラスキンの『ヴェニスの石』，コールリッジの『内省のための手引き』などを読みふけって過ごした。同時にチャールズはしきりに先達の詩人のパロディーをおこない，雑誌に発表するようになっていた。1855年という年はチャールズにとっていろいろなことがあった年で，その様子を感慨と感謝とともに大晦日の日記に次のように記している。

ぼくのこれまでの人生のなかで一番いろいろなことがあった一年だった。年の始めには，学士号をとったばかりの貧しい学生ではっきりした計画も見込みもなかったが，年の終わりには，年収300ポンドを超えるクライスト・チャーチのマスター(教師)で，チューター(個人指導教師)になった。神の摂理により運命づけられて，少なくともあと数年は数学を教授するという道を歩むのだ。大いなる慈悲の数々，大いなる失敗の数々，時間の損失，乱用された才能の数々，――過ぎゆく年はこのようなものであった。

(Collingwood, 64―5, コーエン上, 110～)

こうして出世街道に一歩足を踏み入れたチャールズは，1856年すぐ下の弟スケフィントンが二番目の弟ウィルフレッドとともにクライスト・チャーチ・カレッジに入学し，やがてスケフィントンが父親と同じ道を進むことを決めたのを知って，父親の期待の目が弟に移ったのを確かめると，自主独立をはたして自らを解放することに成功した。5年後には熟慮の結果，吃音障害もあるため牧師にはならず，英国国

教会で職位がいちばん低い執事(deacon)のみに留まる決意をした。

時代は先に飛ぶが，1866年6月22日父親が叔母のメアリー・スメドレイに宛てて，子ども達の現状と彼等の将来像に思いをはせて書いた手紙がある。

彼[スケフィントン]は勤勉に忍耐強く仕事をこなしています。忍耐強さの点では才能に恵まれている兄弟よりずっと上をいっていると思います。教区の貧しい者たちは彼を慕い，いつも暖かいことばで彼のことをはなしてくれます。思慮深く，信心深い人々は，「彼はとてもいい人だ」とか，「彼の読書と説教を誇りに思う」とかいってほめます。仕事に対して彼はわたし以上にライオンのような勇気をもっています。いま，ほかのだれよりも特別な，個人的な思いでわたしは彼のために生きてゆきたいと思っています。

大事な娘たちには，少々苦痛と感じるほどの節約を身につけることを教える必要を強く感じています。そうすれば，たとえ質素でも(当然そうあるべきです)一つ家で暮らしても，独りで暮らすにしても，大きな慰めや利益を知って快適に過せることがわかると思います。

チャールズやウイルフレッドは，黙っていても大丈夫だし，エドウィンも持ち前の力量と用心深さでやってゆけます。スケフィントンは牧師の階位(orders)をとり，聖職録を手に入れることが出来さえすれば，安心して暮らしてゆけるでしょう。そうなれば，シメオンのことばをかりて，「神よ，こころ穏やかに旅立たせてください」と言えるのですが。(Wakeling, *Skeffington*,5)

死の2年前に書かれたこの手紙は，自分の死を予感した父親が，残される家族を思って胸のうちを吐露した内容で万感胸にせまるものがある。父親が一番の心残りとしていたスケフィントンは，父親の死(1868年6月21日)にともない，クロフト牧師館での牧師補の職を失う。しかしほどなくチャールズの斡旋でギルフォード近郊の村で牧師補の職につくことができた。父親の死後チャールズはただちに一家の家長の役割をになって立ち働き，牧師館を明け渡したあとの一家の落ちつき先をギルフォードのチェスナッツ邸に決めた。11月1日の日記には，

ファニー，キャロライン，ヘンリエッタ，ルーシー叔母がチェスナッツ邸に引っ越したのでわたしも行ってきた。あとの人たちも今週中には移る予定。スケフィントンも今週末からサリー州チャートシー教区のトリル牧師のもとで牧師補として働くことになった。エドウィン(末弟)は郵便局の貯蓄課で働きながら試験勉強に励んでいる。わたしも昨日学内の新しい部屋に引っ越した。これで一段落だ。

と，胸をなでおろしている様子が書かれ，それに続けて「『アリス』続編の挿し絵はテニエルが一応引き受けてくれていたが，進んでいないようだ。『ファンタズマゴリア』は順調だが」とある。6月21日の日記は，まだ父の死を知る前の時点で書かれており，それによると「とうとうテニエルが暇をみて『アリス』続編に挿し絵を描く，といってくれたので，18日に彼に手紙を出した」とあって，テニエルとの約束は父親の死以前に交わされていたことがはっきりする。またこの時期一家の一大事でクロフト，ロンドン，ギルフォードと駆け回っていた一連の行程のなかで，ロンドンのスケフィントン叔父の家に滞在中，近くに住むアリス・レイクスに出会い，「ああ，あなたもアリスさんですか」といってかの有名な「鏡の前のオレンジの実験」をしていたことも判明する。この時期『鏡の国のアリス』や『ファンタズマゴリア』の準備を同時進行していた様子は，そのころマクミラン社にあてた彼の手紙の数々に読みとることが出来る(「C.L. ドジスン(ルイス・キャロル)の手紙」2, 185)。

数学講師の肩書きはヴィクトリア朝時代の一男性として必然的で重要なものであったが，彼にとって内面から沸き上がる書く衝動もまた本音の部分で重要であった。そのころにはもう「父と子」のテーマを卒業し，さらに拡大相対化した「老いと若さ」という主題に向かいつつあった。1856年ルイス・キャロルというペンネームを使うようになったのも，単に掲載雑誌の編集長のすすめによるのみではなく，本当のところは自分のなかで数学講師チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン（数学の専門書は本名で出した）と，詩人／作家ルイス・キャロルの使い分けが必要になっていたからであろう。本名を入れかえて筆名にしたことは，24才のドジスンのルネッサンスと位置づけることも出来る。

二つの名前でバランスがうまくとれていた期間はずっと続くが，晩年になって『記号論理学』を開拓し，数学と文学を統合しはじめてからは次第に二つの名前から起こる二面性のバランスを保ちきれなくなり，その道筋で混乱をきたし，やがて厭世的になってゆく。ヴィクトリア朝時代は国の繁栄のかげで，社会の精神疲労が強く，空前の狂気の時代でもあった。彼にとって書くことは正気／狂気のバランス・シートの役割を果たしていたのである。1855年のテニスンの『モード』が青年の狂気と更正を描いていること，1865年ドジスンの『不思議の国のアリス』が正気と狂気のわたりあう世界を描いていることなどにも，そうした時代の反映を見るべきであろう。

どの時代にも時代の価値観にあった女性像がある。ヴィクトリア朝時代には国の繁栄の担い手となった中産階級のあいだに良妻賢母たる女性像が，「家庭の天使」という名のもとに理想のモデルとして求められるようになっていた。「家庭の天使」はコヴェントリー・パットモア（1823－96）の1854年から62年にかけての四部作の詩 *The Angel in the House* に出てくる天使のごとく清らかな妻に与えられた名称に由来する。そこでは結婚の神聖が歌われ，妻の清らかな愛が讃えられる。当時この詩はひろく読まれ，「家庭の天使」という呼び名は理想の女性の呼称として定着していった。（『帝国社会の諸相』，54）

ドジスン家の女性たちはみなヴィクトリア朝の女性の典型といってよい暮らしをしていた。母親（1803－51）亡きあと，社交的な長姉のフランシス（1828－1903）は四番目の妹マーガレット（1841－1915）とともに一家の中心的役割をになっていた。フランシスは，父とルーシー叔母（1805－80）のターミナルケアにも献身した。姉妹たちはそろって奉仕精神に富んでいた。チャールズは次姉のエリザベス（1830－1916）に胸のうちを話すことが多かったとされる。エリザベスはマーガレットと『イン・メモリアム』の索引作りを手伝った。すぐ下の妹キャロライン（1833－1904）は音楽，芝居を好んだ。二番目の妹メアリー（1835－1911）は絵が得意で文学を好み，チャールズがよく手紙を書いた妹である。兄を思うゆえの忠告もした。7人のうちでただ一人結婚した女性である。三番目の妹ルイザ（1840－1930）は病弱だったが，数学の才があり，言語感覚にすぐれていた。「アリスの切手帳」のもとを考案している。東ベンガル鉄道の株券をもっていた（この事実は『スナーク狩り』の解釈の一つのヒントになる）。マーガレットは音楽好きで作曲もした。フランシスとともにチェスナッツ邸をきりもりし，チャールズから贈られた『テニスン全集』をもっており，『イン・メモリアム』索引作りの中心的存在でもあった。五番目の妹ヘンリエッタ（1843－1922）は音楽好きで作曲もした。芝居も好んだが父の忠告により観劇をやめている。美術愛好家でもあり，また猫好きでのちにたくさんの猫とブライトンで一人暮らしをした。チャールズの死後マスコミ報道の誤りに一石を投じたのはこの妹である。ヘンリエッタ以外はみな遺言を残していたが，それは当時一般に行われていた慣習でもあった。（Stanfield, 6）

1861年に出版されたイザベラ・ビートン夫人の『ハウスホールド・マネジメント』（*Mrs Beeton's Book of Household Management*）は当時からよく読まれロング・セラーになった本で，心地よい家庭を築くすべを家の女主人に教えることを眼目にしていた。料理のレシピ，客のもてなし方，召使いの職務につい

て，子どもの育て方，怪我や病気の処置，家の購入の方法，遺言状の書き方，日常生活に必要な法律など，当時女性に必要と考えられた基本的な事柄全般を網羅していた。歴史的にみるならば，さきの「家庭の天使」の概念は，男性による男性のための女性観からくる標語で，やがて囚われていると感じた女性の目覚めとともに陳腐なものになり消えてゆくが，ビートン夫人の『ハウスホールド・マネジメント』は，女性による女性のための家政術であった，という点で「家庭の天使」の視点からは百歩も進んだ本で，ひいては女権拡張への道を拓く方向へむかったと考えられる。2000年になってオックスフォード大学出版局から再版されたことはこれを裏付けるものであろう。1847年テニスンが『ザ・プリンセス』を出版し，宮廷を舞台にして女子高等教育を賛美し当時の若い女性を喜ばせたという事実も注目に値する(ただし，ここではまだ女性は男性に変装して登場していた)。そういった意味では，『不思議の国のアリス』で見知らぬ場でやりくりのできる女の子を主人公にしたチャールズのアイディアを，時代の先がけと見ておきたい。

チャールズは，ロマン派の退潮期にあって新しい詩風をもたらした桂冠詩人テニスンの詩には早くから特別に心酔していた。1850年『イン・メモリアム』発表のあとのテニスンは円熟期にあった。その作品は宗教的，思想的，哲学的，社会的，文学的に詩壇をリードし，上，中流階級に読まれたばかりでなく詩の裾野をひろげる国民的大詩人とみなされるようになっていた。このことは厳格な牧師の長男で，父の跡継ぎとして期待されたチャールズ・ドジスンの肩の荷を軽減するのによい方向に働いたであろう。詩を好む息子がテニスンの詩を読むことに父親も反対は出来なかった筈である。

さきに述べたようにドジスンの詩作はパロディーに始まっている。ドクター・ジョンソンによればパロディーとは，「ある作者のことばあるいは思想をとりあげ，新しい目的のためにすこし変化を加えること」であり，真似してからかうことも含まれる。パロディーの真価を理解するためにはオリジナルの作者のその言葉についての知識をもっていることが必要になる。さもなければ，パロディーの眼目はパロディストの手腕ともどもぼやけてしまうことになる。

イギリス保守党の政治家で，サッチャー内閣で地方自治相や教育相をつとめ，全国共通コアカリキュラムなど教育改革の成立に貢献したケネス・ベイカーはその編著『非公認の詩集―― 詩とそのパロディー――』のなかで，5つの主要なパロディーの形態をあげている。

[1] 有名で特徴的な詩に言及して，その作者を徹底攻撃するもの。
[2] たとえば『ハムレット』の "To be, or not to be" のような原文ををとりあげ，そのままのことばを使いながらべつの情況を組み込むもの。
[3] 文体や調子を攻撃目標にするもの。
[4] 出来るだけもとの詩人のことばを応用しながら，もとの詩の意味をさかさまにするもの。
[5] いちばん一般的なパロディーのやりかた。有名な本歌をつかいそのときの時事的，政治的，社会的話題にあてはめるもの。

(Baker , xx-xxii)

この分類にしたがえば，ドジスンは習作時代，おもに[1]と[4]のパロディーを得意としたといえる。ワーズワースのパロディーを行うときは，本歌をずたずたに分解してわがものにする[1]の方法を採用したし，テニスンの詩はタイトルをパロディーにして中味は独自のものとする[4]の方式を採用した。(ただし『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』では，子どもを楽しませ読者を面白がらせるという意図から[5]の形態も多く見られる)。

ここで[1]の例としてドジスンがワーズワースの『「決意と独立」("Resolution and Independence")またの名を「蛭を採るひと」("The Leech-Gatherer")』(1802)という詩をパロディーにした例をみてみよう。この詩は，若い詩人が詩人としての将来の生活の厳しさ，不安から沈んだ気持ちで荒野を歩いていたとき，蛭を採る老人に出会ったいきさつを書いたものである。蛭は人の血を吸う虫ながら医療に用いられていた。荒野にひとり杖で身をささえながら水をかきまわし，目をこらして蛭をさがす老人の姿に尊厳をみ，問いかけに答える老人の言葉に気高さを感じ，詩人の心にしだいに希望がわく，という内容の詩である。老いと若さをテーマに，ワーズワースがじっさいに会った老人をモデルにして作った詩といわれている。全体は20連あるが，最終の第20連を挙げておく。

And soon with this he other mutter blended,
Chearfully uttered, with demeanour kind,
But stately in the main; and, when he ended,
I could have laugh'd myself to scorn, to find
In that decrepit Man so firm a mind.
'God,' said I, 'be my help and stay secure;
I'll think of the Leech-gatherer on the lonely moor.'

(*Romantic Period Verse*, 262-3)

やがて彼[老人]は他の事をも交えて話した，
その話は快活で，態度は親切で，しかし概して堂々として。
話が終わると，かくも衰えた老人に，
このしっかりした心があるのを見て，
私は自分を嘲笑したい気持になった。
そして云った「神よ，私を助け，しっかり支えて下さい。
私は寂しい沼地の水蛭とりを想い浮かべましょう。」

(『ワーズワース詩集』，102—4)

1856年ドジスンはこれを「荒野にて」("Upon The Lonely Moor")というパロディーにした。しかも「ワーズワースがパロディーをした本歌がこの詩である」という反転した序文まで添えて無記名で発表した。荒野で紳士きどりの若者が田舎者の老人にあい，「なりわいは何だ！」と乱暴に訪ねる。老人は，「石鹸の泡を羊のパイにして売ったり」，「谷川の水から髪油をとって売ったり」，「鱈の目からボタンを作って売ったり」，「地中からバターロールを掘ったり」などと答えて「儲けはさっぱりなのでお恵みを」という。若者は自分のかかえている難問に気をとられ一切耳をかさなかったが，老人が「旦那の健康を祝しビールで乾杯したい」というのを聞いたとき，突然解決策がひらめく。ビールがヒントになって「鉄橋の錆止めにワインをつかう」ことを思いつくのである。そして以後困ったときには「かの老人」を想い出そう，と決意して終わる。全体は9連であるが，第7連の終わりから第8連の一部，そして第9連をあげておく。

....."I get my living here,	...「わたしのなりわいかようなところ，
And very gladly will I drink	よければ旦那の健康祝し
Your Honour's health in beer."	ビールで乾杯といきたいところ」

I heard him then, for I had just	そのことばを聞いたとたんに
Completed my design	まさにそのとき頭に浮かんだのだ
To keep he Menai bridge from rust	メナイの吊り橋の錆どめに
By boilling it in wine.	橋をぶどう酒で煮るという名案が
And now if e'er by chance I put	いまでもうっかり
My fingers into glue,	膠のなかに指をつっこんだり
Or madly squeeze a right-hand foot	いまいましくも左の靴に
Into a left-hand shoe;	右足を押しこんだり
Or if a statement I aver	あるいは自信もないくせに
Of which I am not sure,	誓ってそうだと断言したりしたときに
I think of that strange wanderer	かならず思い出すのは
Upon the lonely moor.	荒野をさまようあの老人

(*Complete Works*, 729-30)

テーマはワーズワースの詩をうけて「老いと若さ」になっているが，ここでは個人のレベルを超えて近代科学のうねりに瞠目する若者のような，時代の変わり目に進んで立ち会う若さのようなものを感じさせる。この詩はのちに書き換えられて『鏡の国のアリス』第8章で，白の騎士がアリスに歌ってきかせた詩として再登場する。そこでは詩のタイトルは「鱈の目」("Haddocks' Eyes")，またの名は「老いに老いたる人」("The Aged Aged Man")，あるいは「方法と手段」("Ways and Means")，ほんとうは「門の上に腰をおろしてた」("A-sitting on the Gate")などと説明され，アリスはタイトルの多さに戸惑う。このようにいったんパロディーの手法を自分のものにしたドジスンは，自らの悦びのため，あるいは子どもを楽しませるために換骨奪胎を大胆におこなうのであった。

2. テニスンとの出会いとドジスンの写真趣味

ドジスンは1850年に出版されたテニスンの『イン・メモリアム』を愛読し，それらをほとんど血肉化していたことは想像に難くない。日記が1855年から始まっていることもあり，その間の詳しい事情はつかめないが，テニスンの作品の語句やイメージに精通し消化していた。テニスンのことばづかいやスタイルの特徴を熟知し，それに魅せられていたドジスンは，彼と同じくテニスンの詩を深く愛読していた姉エリザベスや妹マーガレットとともに『イン・メモリアム』のための索引を編集し，テニスンの了解のもとに，1862年テニスン詩集の出版社であるモクスン社から匿名で出版した。彼はその序文で次のように書いている。

この「索引」では，一句(clause) ごとに最も重要な名詞をとりあげる。二語，三語と重要な名詞があれば，それぞれについてとりあげ，名詞がない場合は，もっとも重要な語，とくに動詞をとりあげる。

版の異なる『イン・メモリアム』にも適用できるよう，語の掲載ページ数および行数ではなく，章(sonnets) と連 (stanzas) の数字を示すことにする。

「索引」は，長詩であるこの詩の詩行ごとの断片を記憶しながら読むのが困難なため，本来は編集者の便宜のためのものであったが，ここに作者の了解を得て出版する。この「索引」が多くの読者の

役に立つことを希望する。

(*An Index To "In Memoriam."*, iii)

この『索引』は約3000語が網羅された52ページの本である。1862年1月に出版されたが，ここにいたるまでのプロセスをドジスンと姉妹たちは大いに楽しんだであろう。7月9日のドジスンの日記には，モクスン社にゆき『「イン・メモリアム」のための索引』が500部売れた，との情報を得たことを記しているし，翌1863年9月30日までには700部が売れたことも明記している。その後1878年4月11日のマクミラン社あての手紙によると，71年までに約1000部売れたことが明らかにされる。モクスン社では，クロス製と，『イン・メモリアム』に綴じ込み用のシートのままのものの二種類が出版されていた。しかしその手紙ではドジスンが，新たにケーガン・ポール社に出版をたのみ，ことわられたいきさつがしたためられ，その時の版元ウオード・ロック社からマクミラン社がシートで取り寄せてマクミラン社から発行，販売して欲しいむね提案している(「C.L.ドジスンの手紙」5，108—9)。その結果78年以降『索引』はマクミラン社から発行されることになった。

次に[4]の例として，テニスンの『1842年詩集』のなかから，「芸術の宮殿」("The Palace of Art")を「悪夢の宮殿」("The Palace of Humbug", 1855)として，「二つの声」("The Two Voices")を「三つの声」("The Three Voices", 1856)としてドジスンがパロディーにしたものをみてみよう。

テニスンは1830年処女詩集『抒情詩集』を，また1832年にも『詩集』を刊行したものの評判はかんばしくなかった。ケンブリッジ大学の俊秀たちによる理想主義者のサークル「使徒会」(The Apostles)の仲間のアーサー・ハラムが好意的な書評を発表したものの，作者に密着しすぎたため反撃の的となった。その後テニスンは親友であり，妹エミリアの婚約者でもあったアーサー・ハラムの急死(1833年)を悼み，直後に稿を草した「イン・メモリアム」や，「アーサー王の死」，「ロックスリー・ホール」，「ドーラ」，「二つの声」，「庭師の娘」，「ものいう樫」などを書き綴っては親しい友人に回覧し推敲をかさねる日々がつづいた。そうした長い期間をへて発表された『1842年詩集』は売れ行きも良好で，ワーズワースやエマスンの賞賛を得るにいたった。

「芸術の宮殿」という詩は，ケンブリッジ大学の「使徒会」の仲間の一人で，のちにダブリンの大司教になった R.C. トレンチ(1807—86)が，1830年処女詩集を出版したテニスンに "Tennyson, we cannot live in art." といったという事実が背景にある。このことばをふまえ，それに応えて書かれた詩を推敲し新たに発表したもので，詩人がめざす理想の芸術観が寓意的に表現されたものになっている。この詩は全体が296行あり，4行詩74連で構成されており，次のような第一連で始まる。

I built my soul a lordly pleasure-house,	私は魂のために立派な宮殿をたてました
Wherein at ease for aye to dwell.	そして魂をやすらかに住まわせるために
I said, 'O Soul, make merry and carouse,	いいました「魂よ，たのしみなさい。
Dear soul, for all is well.'	すべてはうまくいっているのですから」と。

(*Poems of Tennyson*,401)

「魂」は王のごとく宮殿に君臨する。宮殿の外観や庭，宮殿内部の回廊や部屋の壁にかざられた風景画，人物画，シェイクスピア，ミルトン，ダンテ，ホーマー，プラトン，ベイコンなど文学史上著名な文人の肖像などの描写がつづく。「魂」はこのような宮殿に飾られた装飾品こそ自分の神であると考え，そこにひとり住んでこそ「神のような孤高」(God-like isolation) を味わえるといって 満足し，道徳や宗教，理性において超人的であること；自然界や天体の支配者であること，などをロマン派の系譜を意識した

ことば使いで歌う。が，やがて転機がおとずれる(58連)。

Deep dread and loathing of her solitude	深き恐怖とおのが孤独をきらう想いが
Fell on her, from which mood was born	魂を襲い，それはやがて
Scorn of herself; again, from out that mood	自嘲となり，それからさらに
Laughter at her self-scorn.	おのが自嘲への嘲笑を生んだ。

すると宮殿は幻影や夜鬼の徘徊の場にかわり，魂は世界の活動から取り残されていることを知り，すべてに見放された絶望感に打ちひしがれ，罪深くただ一人あることを知る。魂は孤独の深い恐怖と嫌悪に見舞われて，王衣をぬぎすて，宮殿を去り魂の浄化を志し，谷間に小屋をたてるよう懇願する。次は第72，3連である。

She howled aloud, 'I am on fire within.	魂はさけんだ，「胸中に燃えるものがある
There comes no murmur of reply.	しかし，それに答えるものがいない
What is it that will take away my sin,	わたしの罪をあがない，わたしを死から
And save me lest I die?'	守ってくれるものはあるのだろうか？
So when four years were wholly finished,	かくして4年が経ったとき
She threw her royal robes away.	魂は王の衣を脱ぎすてて言った
'Make me a cottage in the vale,' she said,	「わたしのため谷間に小屋を建てて下さい
'Where I may mourn and pray.	そこで悔い改め，祈りたいのです」と。
(418)	

ここで魂は，芸術はうぬぼれを捨て，人間性，敬虔な心，社会的責任をともなったものでなければならないことをさとる。この詩は，ロマン派の詩人たちの残響から新時代にかわる過渡期にあったヴィクトリア朝時代の詩壇にあって，テニスンがトレンチの問いかけをふまえつつ，詩人としていかに生くべきかを自らの問題としてとらえ，理想の芸術観を寓意詩に仕立てた二重の解答でもあった。

ドジスンはこの寓意的な詩を，1855年「神秘と想像とユーモアの歌」そのIで「悪夢の宮殿」(*Lays of Mystery, Imagination, and Humour*, Number 1, "The Palace of Humbug")というパロディーにした。全体は三行詩19連からなる。第1，3連はつぎのようになっている。

I dreamt I dwelt in marble halls,	夢のなかでぼくは大理石の広間に住んでいた
And each damp thing that creeps and craws	ねばねばと這いまわるものたちが
Went wobble-wobble on the walls.	壁のうえで体をくねらせていた
Strange pictures decked the arras drear,	興ざめな壁掛けを飾る奇怪な絵は
Strange characters of woe and fear,	恐ろしくもおぞましい奇人ども
The humbugs of the social sphere.	うつし世に棲むいかさまどもを描く
(*Complete Works*, 725)	(『詩集』, 68)

語り手のわたしは夢のなかで大理石の広間に住んでいる。内部はテニスンの最初の宮殿とは反対の息も詰まるような，頭痛をもよおす，時代遅れの芸術作品にかこまれたところで，テニスンの詩でいえば転機のおとずれと同時に夜鬼や夢魔に占拠された宮殿の場面である。詩の真中にあたる第10連で

ひとつの幻影が消え，つぎにベッドの幻影が現れる。そこでは二人の老人ロウとドウが召使いに看取られ死をむかえている。幻影が去っても「わたし」は夢で見たその死の床の恐怖を忘れられない，という詩である。つぎに第18，19連をあげておく。

Vanished that dim and ghostly bed,	幻影のベッドは消え果てた
(The hangings, tape ; the tape was red:)	(天蓋からは紐飾り　紐は赤かった)
'Tis o'er, and Doe and Roe are dead!	すべては終わった，ドウとロウは死んだ
Oh, yet my spirit inly crawls,	ああしかし，ぼくの心は深くおびえるのだ
What time it shudderingly recalls	あの恐ろしい大理石の広間の夢を
That horrid dream of marble halls!	ふるえながら思い出すとき
(727)	(74)

ここではその目にうつる未知のもの，夢，闇，幻影をいかさまと捉えており，子どもと大人の対立ともとれる。若いドジスンにとってテニスンの詩はタイトルのみをパロディーにするしか方法がなく，ここで使われているドウとロウは，あとでみる「二つの声」でテニスンが用いている 'woe' と 'low' の押韻を借りたものと考えられる。内容からみると絞首か自死という何らかの死にかかわる場を悪夢の宮殿といっているようだ。さきに述べたようにこの時代は狂気，自殺の時代でもあったのである。この恐怖は，のちの『スナーク狩り』(1876)の第三章「ベイカーの身の上話」でベイカーがはらんでいる死の恐怖にもつながるように思われる。

このようにみてみると，ドジスンはテニスンの詩のパロディーには成功しなかったとみてよい。ほかに同じ詩集からの「二つの声」("The Two Voices") を1856年に「三つの声」("The Three Voices") にしているが，これもタイトルのパロディーのみが目立つ。テニスンの「二つの声」は1833年盟友アーサーがウイーンで急死したとの知らせが届いたショックから書かれたとされ，(一方，それ以前とする見方もある) 当初＜自殺への想い，'Thoughts of Suicide'＞という副題があった。それほどまで絶望に沈むなら死んだほうがいいといったり，思い上がりを指摘したりする一つの声が「わたし」に聞こえる。『テニスン全詩集』の編者クリストファー・リックスはそれを信仰とみる。「わたし」は負けずに議論をかえす。ある日安息日の教会へと集う家族の姿をみたことで第一の声は遠のき，ハープのような音色の第二の声が空気をつたわって「わたし」の内面に届く。リックスはそれを懐疑の声とみる。それは見えない花にふる冬の雨のような力でゆっくりと「わたし」を森へいざない，森には間違いや無駄がなにもないことを教える。そして「わたし」は喜び讃える 'rejoice' の声より，懐疑の声 'the ballen voice' のほうへ向かってゆく。

この詩はリックスほか多くの学者から，全体の統一がなくテーマの曖昧性を問われた詩である。その特性ゆえにドジスンは三つ目の声を着想したのかもしれない。ドジスンの「三つの声」も難解だが『スナーク狩り』解釈へのヒントになる含意がみえる。別に稿を改めたい。

1855年3月8日ドジスンは日記に，姉のエリザベスが，ウエブスター夫人(クロフトの副牧師ウエブスター氏夫人)から聞いたといって問い合わせてきた，テニスンが書いたらしいバラクラーヴァ(クリミヤ戦争の激戦地)進撃にかんする次の詩行，"For up came an order, which / Some one had blundered" を，「誰かがテニスンのスタイルを真似て書いたものではないか，真似としてはうまいかもしれないがテニスンらしくない」と評している。英国のクリミヤ進撃は1854年10月25日に始まっていた。リックスによれば，テニスンは11月13日の「タイムズ」紙のバラクラーヴァ進撃にかんする社説に「兵士たちは誰かが馬鹿げた失策をしたことを知っていた」(The soldier knew "some hideous blunder") とあったのを読

んで衝撃をうけ，翌14日の「タイムズ」の戦地報道の記事をたよりに，"Some one had blundered"をそのまま詩の韻律にして，上層部の無秩序な作戦への怒りをしのばせ「軽騎隊進撃」("The Charge of the Light Brigade") を一気呵成に書いたという。そして12月9日ジョン・フォスターの編集する「エグザミナー」誌に A.T. のサインをいれて発表した。(『詩集』, 1034, チャールズ・テニスン『テニスン伝記』, 284～5)。その詩は人気を博す一方批判も受けた。アメリカの若い詩人フレデリック・タッカーマンは1855年1月テニスンを訪ね，"blunder'd" と"hundred" の押韻は再考の余地があると提言した。テニスンは初めはとりあわなかったが，時間をかけて話し合った結果その部分をふくむ8行を省くことにした。しかし「エグザミナー」誌に発表されたもとの詩が戦地の兵士を鼓舞したこともあって，フォスターはもとのままの詩を私家版で1000部ずつ二度戦地に送っている。リックスの注(1034－5)および彼の書いた研究書『テニスン』の解説補遺(330)を参考に，両者をつき合わせてみると，ドジスンの姉が問い合わせてきたものは，『モード』刊行まえの「エグザミナー」誌掲載のものであったことが判明する。

このような背景のもとで詩集『モード』(*Maud and Other Poems*) は1855年7月に出版された。長篇詩「モード」(モノドラマ)のほかに，「小川のうた」("The Brook —— an Idyl"),「ウエリントン公哀悼歌」("Ode on the Death of the Duke of Wellington"),「デイジー」("The Daisy"),「軽騎隊進撃」("The Charge of the Light Brigade"),「F.D. モーリス師に捧げる歌」("To the Rev. F. D. Maurice")などが含まれていた。その時の「軽騎隊進撃」はさきの8行が省かれたままのものであったが，テニスンはその後再考し，ふたたびもとの形に近いものに書きかえ，1856年版以降の『モード』で定着させている。

「軽騎隊進撃」は全体は6連で，それぞれの連は8行，9行，9行，12行，11行，6行と不定形である。ここに1856年決定稿の第1，2，4連をあげておく。

Half a league, half a league,	半リーグまた半リーグ,
Half a league onward,	半リーグづつ前進する,
All in the valley of Death	死の谷のなかを
Rode the six hundred.	600人の騎兵たち。
'Foreward, the Light Brigade!	「前進せよ，騎兵隊！
Charge for the guns!' he said:	砲撃準備！」と上官は叫んだ,
Into the valley of Death	死の谷にむかってゆく
Rode the six hundred.	600人もの騎兵たち。
'Foreward, the Light Brigade!'	「前進せよ，騎兵隊！」との命令に
Was there a man dismayed?	しりごみするものがあっただろうか？
Not though the soldier knew	とんでもない失策があったことを
Some one had blundered:	まるで知らないかのように,
Their's not to make reply,	その命令に口答えもせず
Their's not to reason why,	その理由も問わず
Their's but to do and die:	ただ従って死するのみ
Into the valley of Death	死の谷にむかってゆく
Rode the six hundred.	600人もの騎兵たち。
Flashed all their sabres bare,	サーベルを抜き

Flashed as they turned in air	きらりと輝かせ
Sabring the gunners there,	砲兵を切りつける
Charging an army, while	その突撃のいさぎよさに
All the world wondered:	世界中が目を見張る
Plunged in the battery-smoke	砲弾炸裂の煙のなかに
Right through the line they broke;	一線をこえ飛び込んだ,
Cossack and Russian	コサックとロシアの軍隊を
Reeled from the sabre-stroke	突破できずに散りじりに
Shattered and sundered.	押し戻されながら
Then they rode back, but not	もどってきたのは, しかし
Not the six hundred.	600人はいなかった。

(1034—5)

テニスンがこの詩を朗読するときにはいつも, 第2連3行目の 'knew' [下線筆者]を, 聞くものがはっとするほど力をこめて読んだと, リックスはその著『テニスン』のなかで述べている(230)。テニスンがそれほどまでに「こんなことが許されるか」という思いをこめて書いたことを示唆するところである。

1855年ドジスンはクロフト帰省中の8月14日に『モード』を入手している。日記にはその日一日読みふけったことを記し「美しい詩行も見られるが, この本は詩人の名声を上げもしなければ下げもしないだろう」と言い切っている。"Then life if not so bitter, / But a smile may make it sweet."「この世がそれほど辛くなければ / 微笑ひとつで楽しくなれる」(6章, 10連) を美しい詩行としてあげ, "two men somewhere, Drinking and talking of me,"「二人の男が酒汲みながら/どこかでぼくのうわさをしている」(7章, 4連)はアイディアが独創的でいい, といっている。「ウエリントン公哀悼歌」や「バラクラーヴァ・チャージ」[ママ]が大幅に改作されていることを指摘し, 「あの"some one had blundered"は省かれたが, "sabres" は"sabring" のままだ」と先の姉からの問い合わせの部分に言及している。

テニスンは同時代の作家たちのように自作を朗読するのを好み, とくに『モード』の第一部, 第22章をよく朗読したという。この花の庭の場面は, 『鏡の国のアリス』の第2章「ものいう花たちの庭」に受け継がれている, とオックスフォード・ワールズ・クラシックス版『アリス』を編纂した R.L. グリーンは注記している。9月25日の日記では, 『モード』を再読し, 二度目のほうが楽しく読めたこと, "I have led her home" ではじまる詩章(第一部, 第18章) が真にせまって情熱的なのはテニスンの初恋のインスピレーションから書かれたためであろう, などと書いている。

『モード』は「モノドラマ」という添え書きがあるように, 主人公の青年の身の上ばなしである。青年は幼ないころからのいいなずけで, いま美しい乙女になったモードに燃えるような情熱を捧げる。両家はいまでは確執関係にあり, モードには別に恋人がいる。それでもモードは人目をしのび青年と逢うがそのことが露見する。青年はモードの兄と決闘して兄を刺す。モードは去り, 青年は追われ絶望と悔恨にさいなまれ狂気寸前にいたるが, モードを愛したことが彼の力となって, 人類愛のためクリミヤ戦争で闘う決意をする, という物語詩である。主人公の青年の戦争参加については, 桂冠詩人としてのテニスンの苦渋の選択があった, といわれている。

クリミヤ戦争は1853年から56年まで, 英国, フランス, トルコ, サルディニヤなどの国々が, ロシア軍と闘った戦争で, 54年英国が参戦した。ドジスンは, オックスフォードのクライスト・チャーチの数学講師で先輩の R.G. フォーシットがクリミヤに士官として出征したことを55年2月17日の日記に書いている

ほか，3月16日にはオックスフォードで，クリミヤ戦争の激戦地セバストポル防衛のための講演をきき，6月22日にはロンドンでセバストポルの戦闘方法についての講演会に参加している。9月11日の日記には「セバストポル陥落の輝かしい報道あり。街全体が連合軍の手に落ちたにもかかわらずロシア軍はなお北部方面に砲列を敷いたまま」と書いている。翌年3月26日の日記には，リポンで展示中だった写真家ロジャー・フェントンによる「クリミア戦争写真展」に行った，とある。3月31日の日記には前日に交わされた平和条約で礼拝堂の鐘が一日中鳴り響いていたと書かれ，7月12日の日記には，帰省したときにはいつも訪れるウイットビーのベインブリッジ家ではベインブリッジ中尉が，クリミヤ戦争への出征兵士の輸送監督官としてバラクラーヴァに滞在中であることを聞いた，と書いている。この戦争は英国にとって多くの問題をはらんでいた。フローレンス・ナイチンゲールが1854年11月4日，トルコに到着したのはバラクーバ戦の10日後，セバストポリ戦の前日であった。彼女は陸軍の管理体制の悪弊を根本から立て直すために上司と対決して病院建設，看護の充実につくした。ナイチンゲールの尽力による組織改革など，リットン・ストレイチーは『ナイチンゲール伝』で識者の目からみた当時の実体を書いている。また1854年11月7日，トルストイはロシア軍の一将校としてセバストポリに参戦したことが彼の『セヴストポーリ』に詳しく書かれている。

3. ワイト島，ファリングフォード邸とディンボラ・ロッジでの人的交流

ワイト島は温暖な地中海性気候で，自然美にあふれる地質，動植物にめぐまれた島である。1851年ヴィクトリア女王が一家の避寒，避暑の家として島の北端の町カウズにオズボーン・ハウスを完成させ，女王一家はしばしば訪れるようになる。1851年当時港町ヤーマスの人口は572人であったという。1853年になるとテニスンが島の西端フレッシュウオーターのファリングフォード邸を借りて移り住み，後56年に購入した。

テニスンは，その家の野趣に富んだ庭，野の花，海につづく砂丘，海の眺め，静かさを気に入っていること，たまにロンドンの新しい情報も聞かせてほしいことを，ロンドンに住む義兄チャールズ・ウエルド(テニスン夫人の妹の夫，娘アグネスはドジスンの写真「あかずきん」のモデル)宛の手紙に書いているのを，入江直祐は『イノック・アーデン』の巻末で紹介している(99―100)。

『モードとその他の詩集』に含まれた詩「F.D. モーリス師に捧げる歌」についてドジスンは日記になにも書いていないが，テニスンをとうして F.D. モーリスを知り得たことは，晩年までドジスンの脳裏をはなれなかった「宗教上の難題」を考える明確なきっかけになった点で大きな意味を持つ。この詩はあまり読まれていないようだが，ワイト島では以下に網掛けで示した部分が，テニスン邸を改造したファリングフォード・ホテルの宣伝用絵はがきのキャッチフレーズになっている。

この詩はテニスンが，F.D. モーリスへの友情，宗教思想，クリミヤ戦争のこと，ワイト島の自然，詩人のくらしなど，当時彼の心に去来した感情や風景を写生画風に描いたものである。当時モーリスは，ロンドンのキングズ・カレッジで13年間英文学，歴史学の教授を勤めていたが，1853年に発表した『神学論』や彼の行った講演のなかの「永劫の罰」("eternal punishment")についての見解が異端思想であるとして，大学当局からつきあげられ，その職を追われていた。

かつてアーサー・ハラムやテニスンがケンブリッジの学生で，ともに「使徒会」の一員に選ばれたとき同会のリーダー的存在だったのがモーリスや S.T. コールリッジであった。彼等は，精神の復活は政治的な活動によってよりも，現代文学の流れへの関心によって可能になることを指摘していた。コールリッジはフロイトやユングの時代にさきがけて潜在意識や夢などの重要性を研究しており，彼等にあたえた影響は大なるものがあった。『イン・メモリアム』の第87篇でテニスンは「使徒会」に言及し，「昔学んだ

学寮の / 厳つくも寂れた壁添いに / 又は町並みのあちこちをぶらぶら行けば / 寮 のホールの騒ぎが見える。// 昔ここでは 若い私達の一団が / 哲学を 芸術を 労働を / 又は経済問題を 国家組織のさまざまを / 討論したこともあったのだ。」(入江訳, 159—161)と, ハラムとの大学生活や「使徒会」を回想している。またモーリスは1853年に生まれたテニスンの長男ハラムの名付け親でもあった。

「 F.D. モーリス師に捧げる歌」は, 4行詩13連の長い詩だが, 1854年のワイト島の時空を一枚の風景画にとどめたような趣の詩なので再録し, 訳しておく。

Come, when no graver cares employ,	いらして下さい, 厳しい勤めのないときに
Godfather, come and see your boy:	名付け親よ, あなたの子どもをみに
Your presence will be sun in winter,	あなたの存在は冬の太陽となり
Making the little one leap for joy.	小さき子を喜び踊らせるでしょう。
For, being of that honest few,	どんなに取り柄のないものも公平にあつかう
Who give the Fiend himself his due,	正直な心をもった数少ない一人なのだから,
Should eighty-thousand college-councils	友よ, 大学の八万の評議員があなたに
Thunder 'Anathema', friend, at you;	向かって「異端者」とわめくのも当然。
Should all our churchmen foam in spite	いつも正義を心におくあなたにたいして
At you, so careful of the right,	国教会員がこぞって悪意をこめ泡をとばして
Yet one lay-hearth would give you welcome	怒り狂うのも当然, しかし俗人の一家族が
(Take it and come) to the Isle of Wight.	歓迎するのをお受け下さい。あなたのワイト島訪問を。
Where, far from noise and smoke of town,	そこは街の喧噪と煤煙から遠くはなれて,
I watch the twilight falling brown	夕暮れが小さな砂丘のうねり近くの
All round a careless-ordered garden	荒れた庭のまわりを赤銅色に
Close to the ridge of a noble down.	染めるのを眺めることができます。
You'll have no scandal while you dine,	食事のとき, うわさ話はなにもなく
But honest talk and wholesome wine,	あるのは正直なおしゃべりと健康なお酒だけ
And only hear the magpie gossip	ほかには屋根をおおう松の木の下で
Garrulous under a roof of pine:	さえずり交わす松カケスの声だけ。
For groves of pine on either hand,	というのも家の片方には松の木立があり
To break the blast of winter, stand;	冬の風を遮り
And further on, the hoary Channel	さらに遠くでは波高い海峡が白亜の岩砂に
Tumbles a billow on chalk and sand;	打ち寄せている
Where, if below the milky steep	その海で, もし戦の船がゆっくりと
Some ship of battle slowly creep,	ミルク色の崖の下を通ってゆき
And on through zones of light and shadow	光と影の縞もようをぬけて

Glimmer away to the lonely deep,	きらきらと遠くに消えてゆくのが見えたら,
We might discuss the Northern sin	利己的な戦をはじめた北国の
Which made a selfish war begin;	罪ふかい行いを議論してもよい
Dispute the claims, arrange the chances;	皇帝の国ロシアが勝つか
Emperor, Ottoman, which shall win:	それともオスマン・トルコか, と。
Or whether war's avenging rod	あるいは戦争という復讐の鞭がヨーロッパ全土を
Shall lash all Europe into blood;	打って血を流させるか議論してもよい
Till you should turn to dearer matters,	やがてあなたは話題をかえるだろう
Dear to the man that is dear to God;	神にとってと同じように人間にとって大事な問題に。
How best to help the slender store,	貧しい人たちのわずかの食料の蓄えを援助し
How mend the dwellings, of the poor;	彼等の住まいをなおし,
How gain in life, as life advances,	年をかさねるにつれて, この世でどうやって
Valour and charity more and more.	勇気と慈悲の心を身につけるか, などのことも。
Come, Maurice, come: the lawn as yet	さあ, いらして下さい, モーリスよ
Is hoar with rime, or spongy-wet;	芝生はまだ霜で白く, 濡れていますが,
But when the wreath of March has blossomed,	3月にはクロッカスもアネモネも
Crocus, anemone, violet,	菫の花もかたまって咲き出しますから。
Or later, pay one visit here,	もっとあとでも是非ここにおいで下さい
For those are few we hold as dear;	大事な, 親しい友は少ないのですから,
Nor pay but one, but come for many,	一度だけでなく, 幾度でも,
Many and many a happy year.	そして幾度も, 新年おめでとう。
January, 1854 (1023-25)	1854年1月

ドジスンのテニスンへの尊敬, 憧憬はやがて熱烈なファンがいだく心理のようなものに変化してゆく。1857年8月クロフトに帰省していたドジスンは,「写真をとりたいのでアグネスをつれて牧師館 にいらして下さい」と, さきに手紙で知らせていたウエルド夫人らの一行を, 18日牧師館にむかえた。ウエルド夫人(Anne Weld, 1814-94)は 旧姓セルウッドでテニスン夫人(Emily, 1813-96) の妹にあたり, 王立協会の副会長で図書館長の夫チャールズ(Charles Richard Weld, 1813-69) とのあいだに一人娘アグネス・グレイスがいた。セルウッド家のもう一人の姉妹ルイーザ(Louisa, 1816-79) は, テニスンの兄チャールズ(Charles Tennyson, 1808-79) と結婚していた。セルウッド家の姉妹の母は北極探検家サー・ジョン・フランクリン(Sir John Franklin, 1786-1847) の妹にあたる。

18日の日記でドジスンは, テニスンの義理の妹にあたる人物と, テニスンの話ができたことを喜んでいる。ドジスンは, 友人のサウジーからもらったテニスンの二人の息子の写真を持っていたが, 彼等の名前がハラム(Hallam) とライオネル(Lionel) であること, テニスンは写真を見るのが好きなこと, 息子

たちは可愛いので評判なこと，ウエルド夫人はテニスンの公開されていないいい写真をもっていること，メイオールが公開したテニスンの写真はよくないこと，テニスンの次の詩集がまもなく出ること，ウエルド夫人の夫の仕事のこと，仕事上著名な人々とつき合いがあること，オックスフォード在住の詩人ポールグレイヴ[Francis Turner Palgrave, 1824-97, 当時はオックスフォードのエクセター・カレッジのフェロー，のち詩学教授，『ゴールデン・トレジャリー』の編纂者] もよく知っており，アグネスに彼からソネットがひとつ贈られていること，などを聞いたと綴ったあと，「ウエルドはとびきり美しいというのではないが，感じが良く魅力的だ，彼女の写真を何枚か撮った。いい写真になると思う。写真が出来たらウエルド夫人をとうしてテニスンのもとに届くようにお願いしよう」とつけ加えている。

8月31日の日記には，ウエルド夫人にアグネスの写真を彼女のためとテニスンのためと二枚送ったことが書かれている。この日ドジスンはポールグレイヴの詩集を買い，自分のアルバムのアグネスの「あかずきん」の写真のわきに，ポールグレイヴがアグネスに贈ったソネットのなかから "O fair the blossom of the bough, / Will glorify the setting." 「枝に咲いた美しい花は，/ その木をより美しくする」の部分を書き写した。ドジスンは，アグネスの「あかずきん」の写真を含む4枚を翌1858年ロンドンで開催された写真協会主催の写真展に出品した。

9月2日の日記には，ウエルド夫人から，テニスンは写真をうけとり「珠玉の作品だ」と言ったそうだ，とある。9月は友人のバークレーとスコットランドおよび湖水地方への旅行計画があったドジスンは，ウエルド夫人のことばに力を得て，テニスンに近づく準備が整ったと考え，9月17日カメラ一式を荷物に出して湖水地方にまわった。翌18日，ドジスンは弟スケフィントンと一緒にアンブルサイドからコニストン湖の北端までゆき，そこでマン山に登る弟と分かれ，テニスンの滞在先のテント・ロッジにむかった。そばまで行くと急にテニスンを訪ねてみることを思い立つ。日記にはつぎのように書かれている。

> 夫人だけが家にいたので，名前の下に鉛筆で『アグネス・グレイス の「あかずきん」の写真を撮った写真家』と書き入れた名刺を差し出した。そのおかげで気持ちよく受け入れられ，ほぼ一時間いた。ハラム(5歳)とライオネル (3歳)にも会った。この年頃にしては最高の美男子だ。コニストンまでカメラを持ってきたときに写真を撮らせていただけないかとお願いすると，夫人はテニソンの写真も望みなきにしもあらず，のような口ぶりだったが，写真を撮られるのを嫌うテニスンだから断られている人もいるだろうと思い，そこまでは要求しませんと言ってきた。夫人はテニスンのサインももらえるかもしれないといってくれた。

など，思いがけない歓待に胸をときめかせた様子がうかがえる。22日ふたたびアンブルサイドからコニストンにゆき，ホテルを決めたあとテント・ロッジにゆく。その日の日記には，

> 子ども達の写真を撮る許可を得たいと申し出て客間でしばらく待っていると，ドアが開き，変な恰好のむさくるしい様子の男が入ってきた。髪，ほほひげ，あごひげがぼうぼうで，顔の輪郭がわからなかった。着ていたものは，だぶだぶのモーニング・コート，よくあるフランネルのチョッキとズボン，黒い絹のネッカチーフを無造作に首に巻いていた。髪は黒く，目も黒かったと思う。眼光はするどくよく動く目だった。かぎ鼻で，額がひろく，顔と頭の恰好はがっしりして男らしい。ものごしや態度は親しみやすい。しゃべりかたには乾いた諧謔がかくされている。

と，大詩人テニスンに初めて会ったときの印象を活写している。テニスン一家は数日コニストンを離れ，

三日後にはマーシャル氏(リーズに住む国会議員でテント・ロッジの持ち主)の家にもどってくることを知らされる。そのあとテニスンは,ドジスンをマーシャル家に案内し,彼を紹介し,写真を撮るための許可をとりつけてくれる。帰路ドジスンはテニスンの詩で意味のとれなかったところを質問している。一つは,さきにドジスンが『モード』のなかで,アイディアが独創的でいいと感想をいっていた箇所「二人の男が酒汲みながら / どこかでぼくのうわさをしている,へんだぞ / 'その女だったら大丈夫 / あの相手の男はもてるから,ほっておいても大丈夫'」(第7章,4連)の「二人の男」の人物特定についてである。それにたいしテニスンは「それはモードと,幼いころから彼女との結婚をとりきめた男の,二人の父親のこと」と答えたという。もう一つは「詩人」("The Poet", 1830) という詩の "Dowered with the hate of hate, the scorn of scorn, / The love of love.",「その詩人は憎しみを憎しみ,蔑みを蔑み,愛を愛して財をのこした」のところ(第一連,3—4行,リックスは「注」にテニスンの言として" The poet hates hate... " をあげている。222)で,その意味については,「ことばの持っている意味はどんなものであれ持たせたい。これを書いたときは<憎しみの質>の意味だったのを思い出すが<憎しみの心髄>のほうがいいかもしれない」と答えたという。そして「『モード』ほど批評家の "ばかども" に誤解されている詩はない」とも言っていたという。

その日は夕食に招待され,食事,歓談のたのしい晩を過ごした様子が日記に詳しく書かれている。話題が写真に移ると,ドジスンが撮った写真を見ながらつぎつぎ感想を言ってみせるくつろいだテニスンの姿を,ドジスンは現場報告のような迫力で書いている。

> テニスン夫妻は写真をとても素晴らしいとほめてくれたので,最終的にはテニスンにモデルになってもらえるかもしれないという希望をいだいた。.....
>
> [弟の]スケフィントンが魚釣りをしている写真を見て,あごひげをさすりながら,「ウーン,ここで鱒を釣ったんだったが,この時期鱒が釣れないとわたしの仕事がフイになるんだよ」。そしてスケフィントンの半身像の写真には「おやおや働きがいがないね,一匹も釣れていないじゃないか」といった。
>
> [クロフトの副牧師] ウエブスター氏の一枚目の写真を見て,「先生,どんなことでも議論する心の準備ができています。先生が議論なさりたいと思われる問題は何ですか?運命予定説とかいうあれですか?」といい,二枚目の写真には,「そうかもしれないし,そうでないかもしれない。世の中にはいろんな意見があるものだからね」といった。
>
> サウジーとヒトとサルの骸骨と,ヒトとサルの頭蓋骨を並べて撮った写真を見て,「はじめは人間の頭蓋はサルのとそっくりだ。そこからしだいに変わって来るんだ。人間の頭の形が最初は神々の像に似ているが,だんだん堕落して人間になるのと同じだ。人間もはじめは神の頭蓋に似ている」といって夫人のほうを向き,「これは今夜わたしが言った二つ目の独創的な意見だね」といった。

こうして尊敬しつづけてきた詩人と楽しい一晩をすごし,11時に辞去した,と長かった一日の日記を締めくくっている。テニスン一家がふたたびコニストンにもどった26日から29日まで,ドジスンは連日マーシャル家をおとずれ,28日にはテニスン夫妻,ハラム,テニスンの友人ラシントン氏,ハラムとライオネルとマーシャル家のジュリアの三人一緒の写真を撮った。また29日は「ハラムのいい写真」,居間でテニスンとハラムとマーシャル夫妻と娘ジュリアのグループ写真を撮っている。このことは29日妹メアリーに宛てた手紙のなかで,「テニスンの写真を撮ったし,写真の下におさまるようにサインもしてもらった」と報告している。テニスン48歳,ドジスン25歳の秋のことであった。

1857年は前年カメラを購入したドジスンが積極的に被写体を求め,多くの写真を撮った年である。

よく知られている「ハイアウォサの写真撮影」という小品はこの年11月13日に書かれ，同年12月号「トレイン」誌に掲載さた。写真家と被写体の感覚のズレを書いたもので，ドジスンがことばの達人といって敬愛していたロングフェロウの詩「ハイアウォサの歌」をパロディーしつつ写真家の労苦と苦悩を描いたものである。同じ頃に書かれた「淑女の物語――スコットランドの伝説」ではキマイラというカメラを暗示する機械をもった芸術家が登場する。中世物語を装い，文字まで工夫したが，テニスンの『ゴダイヴァ』("Godiva",1842) を下敷きにしたようである。また，1860年には「写真家の外出」が書かれ，「サウスシールズ・アマチュア・マガジン」に掲載された。日記体で書かれた写真家の日常を描写したものである。

50年代後半はこのように詩と写真という二つの趣味を生かすべく活路をひろげていたドジスンだった。それはもともと自作に挿し絵を描いていたドジスンが，イメージの視覚化を追求してゆくなかで見出した表現方法でもあったのである。

ドジスンの1858年4月18日から1862年5月までの日記はみつかっていないため，その間の事情はもっぱら手紙や同時代人の記録にたよるほかないが，甥のコリングウッドの『ルイス・キャロルの生涯と書簡』には消失した期間の日記の一部が再録されている。

1859年4月8日ドジスンはワイト島のテニスンの家，ファリングフォード邸をたずねている。このことはテニスン夫人の手になる『ファリングフォード日誌』にも次のように記録されている。「ドジスン氏が，朝とお茶の時間と夕方にみえた。サー・ジョン・シメオンとドジスン氏と夕食をともにする。ドジスン氏は写真をみせてくれた」。コリングウッドは4月13日のドジスンの日記を再録している。

夕食後，スモーキング・ルームで一時間ほどすごした。そこに『国王牧歌』[最初の4巻は1859年出版]のゲラ刷りがあったが，みせてもらえなかった。帰りがてらテニスンと庭を散歩したとき，月の光が細い白い雲にさしているのをとらえ(わたしは気付かなかったのだが)「月のうしろの金の光の環」といって，この光景を若いころの詩『マーガレット』(1832)に "tender amber" と書いたことがあるといった。

「Sydney Dobell という詩人をどう思われますか？"Grass from the Batterfield" が好きなのですが」というわたしの意見に賛成しながら，「想像力は天才的だが少々どぎつい」といった。

乞食の扮装をしたアリス・リデルの写真をみせたところ，テニスンは「今までの写真でいちばん素晴らしい」といった。テニスンは長い詩を書いた夢を見て，そのときは実にいいと思ったが，目覚めたら，10歳のときに夢に見たことがある May a cock sparrow / Write to a barrow? / I hope you'll excuse ? / My infantile muse; (雄の雀は　豚に手紙を　書いてもいいかな？　ぼくの幼い詩神よ) という4行だけになっていた，とも話した。「これは桂冠詩人の未出版の断片だ。面白いが，後の詩人の片鱗もない」とドジスンは書き加えている。あるときはとてつもなく長い妖精のことを詠んだ詩の夢をみたのだが，はじめは長かった一行がだんだん短くなって，二語づつが50行か60行もつづいて終わった，という夢の話もした。

(Collingwood , 79)

1859年5月11日に，ドジスンがいとこのウイリアム・ウイルコックスに宛てた手紙がある。それには，友人のコリンズを訪ねるためにワイト島のフレッシュウオーターに行ったときのことが，弟のウイルフレッドにまるでテニスンの追っかけのように親しい人たちに宣伝されてしまったのを修正する意図がうかがえる。そのために，とても詳しく事情がのべられている。その年のイースターの休暇の時期，コリンズが「まだテニスンはファリングフォード邸に来ていない」といっていたが，「自由な国の国民として午後の社

交訪問の権利を使いテニスンの家の庭に近づくと，ペンキを塗っている人がいたので，「テニスン氏はご在宅ですか」ときいてみたら，「あそこにおられます」といって芝刈りをしている人を指さした。それで，ドジスンは驚きと喜びに満たされた，というのである。

テニスンは家へ案内して写真などを見せてくれました。(ぼくの撮ったのも何枚か厚紙の額にはめて掛かっていました。テニスンは天窓からの眺めが島でいちばんの眺めだと言って，リチャード・ドイルが描いたそこからみた風景画をみせてくれたり，最上階のスモーキング・ルームを見せてくれたりしました。……翌日夕食に招かれ，ジョン・シメオン卿にお目にかかりました。そこから数キロのところに地所をもっておられる方です。クライスト・チャーチ出身で，その後ローマ・カトリックに転向した方です。とても愉快な方で，どんなに素晴らしい夜だったか，想像していただけるでしょう。スモーキング・ルームでの二時間は最高に楽しいものでした。

テニスンの話では，詩作に没頭したあと眠ると，よく詩の夢をみることがあるといっていました。そしてわたしのほうを向き「君ならきっと写真の夢でしょう」といいました。(*Letters*, 35-8)

また，ウイリアム宛のその手紙を多少書き換え，テニスン訪問記としてメネラ・スメドレー(ドジスンの親類で作家。ドジスンの作品を編集者に紹介する労をとった人物)に回してもいいか，とのウイリアムへの打診なども書かれた長い手紙になっている。

キャメロン夫妻はキャメロン夫人(ジュリア・マーガレット・キャメロン)の姉プリンセプ夫人のロンドンの家「リトル・ホランド・ハウス」が，ヴィクトリア朝文化の一大サロンになっていたことから，自分たちもそのような家をワイト島に持とうと計画した。そして1860年に，テニスンの住むファリングフォード邸の隣に家を購入し，インドに所有していたコーヒー園の名にちなんでディンボラ・ロッジと名付けた。彼等はそこに多くの芸術家，文化人を招き，夫人は64年頃から本格的にそこに集まる人々の写真を撮るようになり，女流カメラマンとしての名声を高めた。若いモデルのエレン・テリー(16歳)と結婚した画家のワッツ(46歳)は結婚当初「リトル・ホランド・ハウス」に間借りしており，ときどきディンボラ・ロッジに滞在していたという。

ドジスンは休暇にはオックスフォードをはなれクロフトにもどり，そこから近い海辺のウイットビーですごすことが多かったが，1862年にワイト島をふたたび訪れて以後しばらくつづけて訪れるようになった。ファリングフォード邸のほかに1860年以降はディンボラ・ロッジへの関心が高まったものと考えられる。ドジスンはテニスン家の子ども達やキャメロン家の子ども達とも親しく交わったが，なにより同じ写真仲間のジュリア・マーガレット・キャメロンの人柄を慕って著名な人々があつまるディンボラ・ロッジの雰囲気を好んだようだ。ただしキャメロンの写真のピントの甘さを好まなかった。

1862年4月19日にはワイト島から妹メアリー宛にあてた手紙がある。この休暇中ドジスンはキャメロン夫人に会っている。テニスン家で子ども達と「像狩り」というゲームをしたあと，アイルランドの民話(「オグレディー」など)を話してきかせていたとき，子ども達はフレッシュウオーターの海に向かって歩いているキャメロン夫人の姿を見つけ，あとを追って駆け出していった。子ども達はキャメロン夫人を連れて戻ってきたのでわたしは子ども達をよろしくといってわたしはホテルに戻った。キャメロン夫人がテニスンの写真をくださったので『イン・メモリアム』の「索引」を差し上げた」。この訪問でドジスンは，詩人のヘンリー・テイラー夫妻やその子どもたちに会って写真を撮っている。キャメロン家の子ども達，テイラー家の子ども達と海辺で遊んだあと，午後テニスン家を訪れ，ハラムとライオネルの写真の下にそれぞれサインしてもらった，とある。

1863年7月25日から31日までドジスンはジョージ・マクドナルドー家が住んでいたハムステッド・ヒースのエルム・ロッジにカメラをもって行きたくさんの写真を撮った。7月27日の日記には「一日中写真を撮った。F. D. モーリスが来てお昼を一緒にし，そのあとカメラの前に坐ってくれた。うまくいった」。このころドジスンはロンドン滞在中よくモーリスの教会に行き説教に耳を傾けるようになっていた。1862年7月20日には「モーリスの説教を聞きに行く。彼の説教はいい」と書いている。モーリスの思想はドジスンの宗教観に大きな影響をあたえた。ドジスンは，父親とはちがいブロード・チャーチを支持し，自由な宗教観を模索していた。そしてモーリスの思想に感銘を受けており，1862年から3年にかけてモーリスと宗教思想上の手紙のやりとりがあった。ドジスン長年の命題である「宗教上の難題」もモーリスの思想に触発されたもので，のちに記号論理学をつかって難題に挑むきっかけとなった。

このようにみてくると，当初まったく文学的環境に恵まれていなかったドジスンが，テニスンに憧れ，自ら近づいてゆくことでそれまで彼の日常にはなかった文学的談論の場をひろげていったのを確認することができる。アーサー・ハラムの死後一貫してテニスンが温めていた詩のテーマ「死と再生」を，早くに母を亡くしたドジスンもタブーとはせずごく自然に作品の中に取り入れてゆくことができたようだ。これもテニスンとの交流からくる自信の裏付けがあってのことであろう。『シルヴィーとブルーノ』前編の序文には，死を人生の避けられない事実として子どもの本に書きこむ決意が語られている。1850年代後半はドジスンの20代後半にあたるが，父親を超え，テニスンと肩をならべる可能性が見えはじめていた。

［本論は2001年10月，日本イギリス児童文学会での研究発表「C. L. ドジスンと A. テニスン」，および日本児童文学学会でのラウンドテーブル「『アリス』の諸相——現代からキャロルを考える——」での発題に加筆訂正を行ったものである。］

［参考文献］

1. Cohen, Morton N., *Lewis Carroll*, Macmillan, 1995, 高橋康也監修『ルイス・キャロル伝』, 河出書房新社, 1999。
2. 平　倫子,『ルイス・キャロルの図像学』, 英宝社, 2000。
3. Collingwood, Stewart D., *The Life and Letters of Lewis Carroll*, Fisher Unwin, 1898.
4. Wakeling, Edward, *Skeffington Hume Dodgson*,L&T Press Ltd., Luton,1992.
5. Clark Amor, Anne, Edited and with an Introduction, *Letters to Skeffington Dodgson from his Father*, The Lewis Carroll Society, 1990.
6. Carroll, Lewis, ed. by Morton N. Cohen and Anita Gandolfo, *Lewis Carroll and the House of Macmillan*, Cambridge University Press, 1987, 平　倫子訳,「C. L. ドジスン(ルイス・キャロル)の手紙2」, 北星学園大学文学部,『北星論集』第32号, 1995。同「手紙5」『北星論集』第38号, 2001。
7. 松村昌家他編, 英国文化の世紀シリーズ2,『帝国社会の諸相』, 研究社, 1996。
8. Stanfield, Sarah, 'The Dodgson Sisters', *The Carrollian*, No. 2, The Lewis Carroll Society, York, 1998
9. Beaton, Isabella, *Mrs. Beaton's Book of Household Management*, Oxford University Press, 2000.
10. Baker, Kenneth,ed., *Unauthorized Versions*, Poems and their Parodies, faber and faber,1990.
11. McGann, J. J., ed. *The New Oxford Book of Romantic Period Verse*,1993.
12. W. ワーズワース,　田部重治訳,『ワーズワース詩集』, 岩波文庫, 1957。
13. Carroll, Lewis, *The Complete Works of Lewis Carroll*, Nonesuch, 1973.
14. キャロル, L., 高橋康也訳,『ルイス・キャロル詩集』, 筑摩書房, 1989。
15. Carroll, Lewis, *Index to In Memoriam*, Moxon, 1862.
16. Tennyson, Charles, *Alfred Tennyson* by his grandson, Macmillan, 1949.

17. テニスン, 入江直祐訳,『イノック・アーデン』,『イン・メモリアム』, 岩波文庫。

18. トルストイ, 中村白葉訳,『セヴストーポリ』, 岩波文庫, 1992。

19. ストレイチー・リットン, 橋口稔訳,『ナイチンゲール伝』, 岩波文庫, 1993。

20. Carroll, Lewis, ed. by Morton N. Cohen, *The Letters of Lewis Carroll*, Macmillan,1979.

21. Tennyson, A., ed by C. Ricks, *The Poems of Tennyson*, Longman,1969.